

# ピアノの学習に於ける読譜に対する 注意力についての一考察 (その1)

蔵 清 蔵

## I. 緒 言

ピアノ演奏の上達に必要な条件は数多くある。

第一に完全なる読譜

第二に打鍵の諸条件の習熟

第三に美感, 芸術性, 世界観, 思想など精神的な面の陶冶

更にそれらの厳しい訓練に耐え得る体力と精神力, 又これらを実現させ得る環境が必要である。

先ず学習者に必要な第一の条件たる完全なる読譜について述べることにする。

読譜に対する注意力の重要性は, ピアノ演奏の場合は大譜表を用いる関係上, 特に大なるものがある。(パイプオルガンの場合は更に足鍵盤の部分加わるが, これは今後の研究に譲る)

学習者は必ず楽譜の諸記号, 諸標語, 諸規則を教授される。したがって彼等はこれらを一応認識しているにもかかわらず, それを實踐しない動きがあまりにも多いのはなぜであろうか。印刷された諸記号, 諸標語などに無関心であるため, 盲目的な学習にひとしい結果が生ずる。しかもそれが熱心に反復すればするほどその結果は悪くなる。恰もA地に行きたい旅行者が不注意のためにB地に向っているのを知らないのと似ている。誠に無益な時間と労力は莫大なものになることを痛感せざるを得ない。ここにその原因を調査し, 合理的にその無駄を排除してゆく方法を取り扱ってみる。

鋭敏な注意力はピアノ上達の速度を倍加させるものである。最初与えられた楽曲を第1回目の学習時に芸術的, 或は熟達した味を持たずとも, ただ印刷通り一指使い, 発想記号その他, 変更の要ある場合はあらかじめそうしておいて

もよいが一忠実に, 或は教師のあらかじめの諸注意や, 命じたことについて諸規則を完全にまもるべきである。

## II. 不用意な憶測, 無気力, 錯覚, 勘違い, 惰性などからくる読譜の誤謬

### 1. 音符の高低

鍵盤数が多い関係上, 加線を用いることが多く, 最初の読譜を見誤ると, それが正しいと思いつく固定観念の如きものに支配され, 誤りのまゝ反復習熟される。その時は視覚が視覚の用をなまず, 一方的な自分よがりな概念が駆使されるのである。誤りが熱心に反復さればされるほど, その矯正は困難となる。頭脳が命ずる前に無意識に指が動き, その矯正に時間と労力を浪費する。

例 1. 省略記号 8<sup>.....</sup>のみおとし

2. 音部記号の楽曲の中途の介在の見おとしなど

### 2. 調号

この調号の確実な把握ほど重要なことはない。これの不確実な把握は, ほとんどのピアノ学習者が陥る穴である。学習者は初めは注意を怠らなかつもりだが, 中途からは初めの認識を忘れ, 誠に奇妙なものになる。或は, 学習中の別の楽曲と混同してしまい, それを挽回する労力は実に大きな無駄といわねばならない。

### 3. 臨時記号

調号とほぼ同じく, 或いは, それ以上に学習者が厳守せぬものの一つで, 特に小節の頭初に

臨時記号があれば、その誤謬が甚だしい。

例 Bach: Invention II. Vo. No. 2

12小節目

一度訂正された誤謬を2度、3度、繰り反すのは論外の沙汰である。

#### 4. 諸記号

二音間に slur があると tie と混同する

例 Bach: Invention III. Vo. No. 3

18~19小節目

phrasing の細心の注意を怠るため、その楽曲全体を再確認する必要に迫られる。しかも注意された跡があるにもかかわらず、なおかつ同じ誤りを犯すのは、一体何が原因しているか。staccato と legato の区別、accent 記号や tenuto、これらは当然守らなければ、学習の意義は失われる。只々音符の単なる鍵盤への置きかえをして事足りれりとしている。

#### 5. 音符の長さ

けだし音楽学習に rhythm とか tempo の如き重要にして欠くべからざるものはない。これを疎漏にすると、あたかもレコードの廻転速度が常に変動しているのと似ている。これは全く鑑賞の用をなさないときえ極言できる。特に同一楽曲内に多くの違った音符群が交互に現われるものが、この誤りに陥り易い。

例 Mozart: Sonate K. 545 C dur I. mov.

16分音符と8分音符の数え方が混同したり、そのため倍の速度の誤差や、曖昧な一時的な rhythm の空白になる事がしばしば起るものである。かくの如きピアノ学習は、第一歩の時の重要な約束を履行せず、全く怠惰と鈍感からくるものというべきである。

#### 6. 拍子記号

ちなみに学習者に、ハノン・ピアノ教本の scale は、何拍子で書かれているかと質問してみよう、おそらく正答が不可能な学習者が、予想以上に多い事に気付くであろう。かれらは只単に音を羅列するにすぎないか、或いは常に

rhythm を念頭に置いていないのである。

ハノン・ピアノ教本にかぎらず、学習中の楽曲の拍子を確認せずに、したがってアクセントの意識もなく誠に滑稽な現象がおきるのである。時間の空費、ピアノの学習と称する無意味な労作を続けるわけである。故に学習者は最初に楽曲を当る前に、拍子記号を沈着かつ確実に把握せねば、折角の学習も徒労に終る。

#### 7. 指使い

これ又驚くほど無関心な例が多い。ピアノは「指で弾く」ものであり、指の事を思考せずに弾く事はあり得ないにもかかわらず、誠に無頓着にしてぞんざいである。したがって真の意味での「指で弾いて」はいない結果をきたらす。音符の上又は下に、どの楽譜にも丁寧な数字が付されており(指番号その他、諸記号が欠除している楽譜は、又それ自体意味がある)これを無視しては、丁度カリキュラム抜きの、学校経営が滑稽であるのと同じであろう。しかし学習者は一般にこの点については不注意無関心のものが多い。又、指使いを守ったとしても直接そこに印刷されている部分については守られるが、同形のため省略された部分は無意識に指を運び、又ふた通り或は数通りの指示された指数字を研究もせず、偶然ある指で触れる如き、無気力な偶然にまかせている。

### Ⅲ. 諸楽語・略語についての

#### 不注意からくる誤謬

##### 1. 速度記号・標語

与えられた楽曲を正しく演奏せんとするのに、その楽曲の速度記号を知らずに、楽曲の冒頭に指示された記号或は標語に、注意を向けないのは不思議である。たとえ練習し初めは遅いテンポで始めるのは当然であるが、その楽曲の本当の速さを知らずに練習するのは不合理である。その指示されたテンポに至る過程の練習の

仕方が自ずから、生ずるものである。

## 2. 強弱記号・標語

学習者は学習者自身どの位の強弱演奏をしているかを認識せず、或は考察せずに進行していることが、いかに多いことか。

たとえ最初は示された通り演奏しても、楽譜の2段目、3段目になると、もはや考えようともせずに進行していることが、いかに多いことか。これは矯正せねばならない重大な問題であり又細心の注意を要するものである。

crece. dim. について特に誤りやすいのは、その持つ意味はよく理解しているにもかかわらず、その用い方が粗雑に流れる傾向がある。記付してある所より、夫々漸次に強く、又は弱くの意を、視覚と、不用意な精神状態との交錯で、直ちに強く、又は弱くと誤解(無意識に)するのである。又時には印刷の記号、標語を物理的な目は見ているが、注意力がともなわないため、見えないと同じ結果に終るものもある。

## 3. 発想記号・標語

幼少の学習者でも、dolce leggiero くらいは理解させる必要がある。おゝむね楽曲の冒頭に記された発想標語を確認せずに演奏することは、行先を確認せずして汽車に乗るのと似ている。dolce は Beyer ピアノ教則本の61番に説明があり、leggiero は80番に解説がある。しかるに学習者はそれらのものが、あたかも不必要であるかの如く取扱うのである。

## 4. 作品番号

若干の作曲家を除き、ほとんどの作曲者は作品番号を自作の楽曲に付している。

例えば op. 10の2とか遺稿 (posth.) とか Mozart のケツヘル番号とか、注意深く楽譜をみる必要がある。一寸した注意力が思いがけぬ知識欲を旺盛にし、計らずも意外な収穫をするものである。目次の楽曲群の作品番号を調べて、一つの作品が数曲、或は十数曲に及ぶものがあり、学習中の楽曲がそのどれに当るかを知り、演奏上大いに役立つ事がある。又その楽曲がその作曲者のいつ頃の作品であるかということもほぼ見当がつき非常に興味深いものである。そ

うしてそれらの事を調査するに要する時間は誠に僅少なもので事足りるのである。

このように重要な事柄を調べる時間を節約し、無意味な、不合理な方法での反復一指の体操一を龐大な時間を費やすのを惜しまないことは誠に悲しむべき問題である。

## 5. 学習・練習時間の長短

ピアノ学習について、しばしば「1日に何時間弾けばよいか」という質問を受けることがある。これについて考察したい。勿論、細心の注意を怠らず、合理的に練習するとすれば、即ち質と内容の充実した時間であれば、上達率が增加することは当然であるから多いほどよい。

しかし只単に練習時間の長短にのみ拘泥するのは読譜に於ける誤謬とほぼ相似た愚かな思惑である。読譜の誤りを犯した反復練習は無意味な時間の空費で誠に愚かな労作と言わねばならない。否それのみかむしろ目的に背いた方向へ驀進するものである。

その誤謬を発見した時一おおむね学習者自身で発見することは稀であり、教師その他の指摘による一すでに1週間或いは数週間の誤謬の積み重ねをした時間と労力の損失の上に更に訂正を加える努力と気力は莫大なものであり、その悪い積み重ねの習慣から離脱するのは容易な業ではない。上達の如何はまずかくの如き所にその左右を決定する鍵が潜在しているのではなからうか。

## 6. その他

イ) 読譜自体の事柄とはすこし意味を異にしているが、楽譜によっては実に懇切丁寧なる註解、楽曲解説、欄外の注意事項などを充分に参考にしなければ、楽譜の価値を半減させるものである。

ロ) 裝飾音符の演奏法一覧表(冒頭・末尾)又は欄外の裝飾音(楽曲内にある)の演奏法指定など、有効に使用すべきである。

ハ) 国内国外を問わず当該出版物にかんしては、著作者、編集者及び出版社名などの認識は演奏上の種々の条件と密接な関係があり、決し

て看過できないものである。

かくの如きピアノ学習者の習慣的な読譜に対する不注意はその上達過程の隘路となっている

表 1. 被 験 者 一 覧

	小 学 生 N=15					中 学 生 N= 8			高 校 生 N=11			計
	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	
男	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2
女	2	1	7	1	3	1	5	2	2	3	5	32
計	2	1	7	1	4	1	5	2	2	3	6	34

#### Ⅳ. 注意力についての実験調査

以上のような見地より、ピアノ学習者の学習の上達、ことに読譜の能力との関係をみるため注意力に関する心理検査を行い、上述した諸問題の解明への一考察を行った。

##### 1 方法および対象

###### 〔対 象〕

調査の対象となったのは筆者の門下生のうち34名であるが、その構成は表1に示される。

男女の構成比をみると大多数が女子であるため、集計はすべて男女を一括してかゝげ、今回は男女差については問題にしないことにする。

###### 〔方 法〕

読譜に関する能力を評定するには、次の尺度を用いることとした。

- I. 本人の学業成績・知能・行動特性に関するもの（在学校における記録簿による）
- II. 個人指導に於ける音楽能力
- III. 読譜及び注意力に関係あるとみられる心理テストの結果  
心理テストは次の4つのサブテストよりなる
  1. 文字提示照合検査\*（中・高校生のみ実施）
  2. 抹消検査（全員実施）

##### 3. 型盤はめこみ作業検査（全員実施）

##### 4. 数字照合検査\*\*（小学生のみ実施）

1. 文字提示照合検査とは、図1に示すごとく、アルミ板に記された二種類の文字群を照合し、**「同じもの、と異なるもの、とを見わける作業である。**検査器の把手を操作することによって提示板が次々に出現する適性検査器具の一種である。

2. 抹消検査は図2に示すごとく多数の図型のうちより特定の図型を抹消するテストで職業適性検査、知能検査、注意力検査等に用いられている。

3. 型盤はめこみ作業検査は、種々の異った図型を、一定の型の中にはめこみ合わせるもので、適性検査器具の一種である。

4. 数字照合検査は、文字提出照合検査と類似しており、文字の代りに数字を課題としたものであるが、数字の提示は機械によって行われず、ペーパーテストにより行われるものであり知能検査、適性検査等に用いられている。

なお、読譜・注意力に関する上記心理テスト自体の信頼性を検討するため、3種類のテスト相互の相関係数を算出した。

表2、表3に示されるごとく、中・高校生群の方が小学生群に比べてやゝ低い係数を得ているが、全般的にみて、3種類の心理テストの結果はかなり信頼のおけるもの\*（次頁下段の註欄参照）にして、以後の読譜に関する研究・考察に充分使用し得ると考えられる。

註)\* \*\*小学校低学年に於いては文字の読解能力の優劣によって結果が影響をうけることを防止するため、テスト1にかえてテスト4を行なった。

ハンドルを動かすごとに一枚ずつ順に見える

例

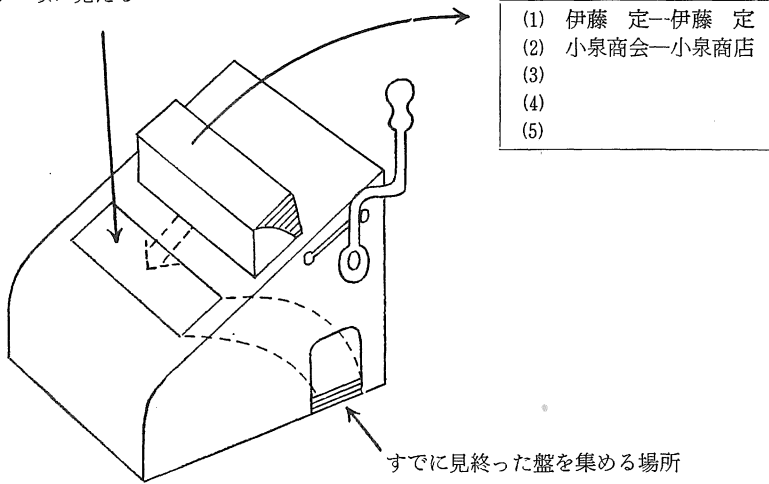


図1. 文字問題照合提示器

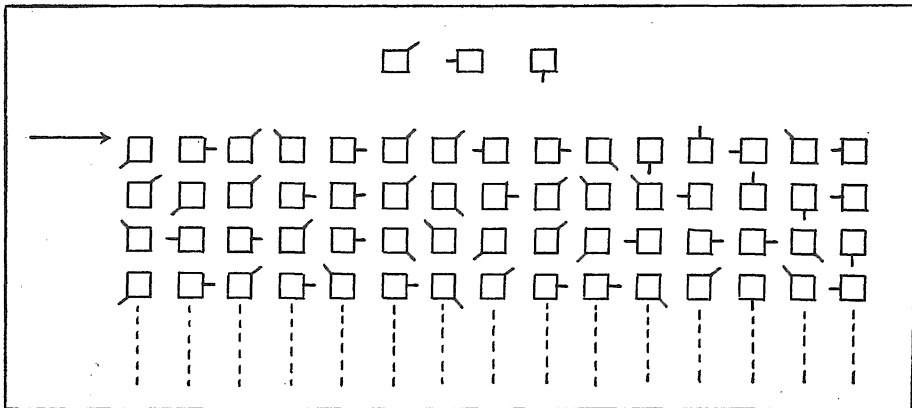


図2. 抹消検査上部の3種の図型をみて矢印の順に同形の図型を抹消してゆく(二分間)

表2. 小学生のテスト間相関\* (N=15)

	抹消テスト	型盤はめこみ	数字照合
抹消テスト	—	0.59	0.83
型盤はめこみ		—	0.58
数字照合			—

表3. 中学校・高校生のテスト間相関 (N=19)

	抹消テスト	型盤はめこみ	文字照合
抹消テスト	—	0.33	0.78
型盤はめこみ		—	0.44
文字照合			—

註) \* ギャレットによれば相関係数の解釈を次のように区分している

r=0.2~0.40 低い あるが少しの相関

r=0.40~0.70 実質上の 又はいちじるしい相関

r=0.70~1.00 高い 非常に高い相関

ピアノの学習に於ける読譜に対する注意力についての一考察(その1)

表4 読譜にかんする基礎資料一覧

番号	氏名	知能段階				学業成績				行動特性			音楽能力 音評	Time	注意力テスト得点記録							総合 評価	
		SS	IQ	評価		国	数	理	音	体	総合	注意 力			着 意	そ 他	速度 率	正答 率	正確 度	能率 指数	型盤 検査 Time		数字 検査 得点
				評	価																		
1	I.N.				5	4	5	5	4	5	有	有	すな	9				0.9	47.7	3'27"	5.5	下	
2	K.U.				5	4	4	4	4	4	有	有	お	8				0.1	32.0	5'20"	4.5	下	
3	M.S.	60			4	3	3	4	4	4	有	有	が	4				0.7	31.5	3'29"	7.5	下	
4	A.Y.	66			5	5	5	4	3	5	有	有	ん	8	向上中			0.9	101.7	3'27"	12.5	上	
5	M.A.	66			5	4	3	5	3	4	有	有	こ	6				0.9	90.0	1'58"	11.0	中	
6	I.R.	66			4	3	3	3	3	3	有	有		7				0.7	46.9	2'49"	10.0	下	
7	K.J.	66			5	5	5	4	5	5	有	有		7				0.9	68.4	2'25"	12.0	中	
8	H.H.	65			4	4	3	4	3	4	有	有		9	有 望			0.9	54.9	2'14"	11.0	中	
9	K.M.				4	4	5	4	3	4	有	有	努力家	9	有 望			0.9	37.8	3'50"	8.5	下	
10	M.T.		106		5	5	5	4	5	5	有	有		3				0.9	63.9	2'00"	9.0	中	
11	K.M.	60			4	4	4	4	2	4	有	有	努力家	6	向上中			0.9	90.9	2'29"	10.0	中	
12	A.U.		118		5	5	5	4	3	5	有	有	無口	6	無 口			0.3	120.0	2'38"	13.5	中	
13	K.M.				5	5	5	4	3	5	有	有		7				0.9	103.5	2'26"	13.5	上	
14	M.E.	74	161		4	4	4	5	3	4	有	有		7				0.9	90.0	2'23"	13.5	中	
15	H.K.	65	149		4	4	5	4	3	4	有	有		5				0.9	116.1	1'30"	15.5	上	
16	I.S.				4	4	4	5	4	4	有	有	努力家	9	有 望	9'05"	0.3	0.6	0.9	60.3	1'59"		下
17	M.R.	44			4	4	4	5	4	4	有	有		7		7'11"	0.4	0.8	0.8	144.0	1'56"		中
18	N.N.	74			3	4	4	4	4	4	有	有		6		5'50"	0.3	0.6	0.9	135.9	1'54"		中
19	S.M.	51			4	5	5	5	4	5	有	有		7		9'09"	0.3	0.7	0.9	118.8	2'50"		下
20	A.M.	70	153		3	3	4	4	3	3	有	有		7		7'43"	0.3	0.5	0.9	54.9	2'22"		下
21	N.N.	63			5	4	4	5	4	4	有	有		8		5'21"	0.2	0.4	0.8	118.4	1'41"		中
22	K.H.	62			4	3	3	4	4	4	有	有		6		7'29"	0.4	0.8	0.9	263.7	1'42"		上
23	K.I.	55	112		3	3	2	3	4	3	有	有	無口	7	着 実	5'14"	0.1	0.3	0.9	180.9	2'27"		上
24	M.Y.				3	4	4	4	3	4	有	有		8		6'09"	0.2	0.3	0.9	178.2	1'23"		中
25	M.H.				5	5	5	5	5	5	有	有		9		8'56"	0.4	0.8	0.9	202.5	1'50"		上
26	O.E.				2	3	3	5	3	3	有	有		8		5'43"	0.4	0.7	0.9	199.8	2'00"		中
27	W.K.		102		3	2	3	4	3	3	有	有		7		6'15"	0.3	0.6	0.8	125.6	1'30"		中
28	Y.Y.				3	3	3	3	3	3	有	有		7		7'47"	0.4	0.7	0.9	144.9	3'17"		中
29	H.Y.				4	3	2	3	4	3	有	有		7		7'00"	0.3	0.6	0.9	147.6	1'57"		中
30	H.S.				4	3	3	4	4	4	有	有		6		5'52"	0.4	0.8	0.9	189.0	1'30"		上
31	H.N.				3	3	4	2	3	3	有	有		6		6'12"	0.4	0.7	0.8	197.6	1'42"		上
32	W.E.		95		2	2	4	3	3	3	有	有		7	不注意	5'42"	0.1	0.2	0.9	104.5	2'27"		下
33	O.E.				3	2	3	3	3	3	有	有		7		5'40"	0.2	0.4	0.4	72.0	2'15"		下
34	T.J.				3	3	3	4	3	3	有	有		8	向上中	5'52"	0.3	0.6	0.7	188.3	1'47"		中

2. 結果および考察

上述したI.II.IIIの結果は表4に示すごとくである。

さて、これらの心理テストによる注意力の高いものと、低いものと音楽の能力(個人レッスン)との比較を試みたところ、表5の如き結果をえた。

表5. 注意力テストと音楽能力の比較

注意力テスト	上位群 N=8	中位群 N=16	下位群 N=10
音楽能力	6.7	8.5	7.4

中位群>下位群>上位群  
\*\*はp<.02を示す

上位群, 中位群, 下位群のそれぞれの得点差を、マン・ホイットニーのU検定により検討したところ、音楽能力は、中位群がもっともすぐれ、ついで、下位群, 上位群の順となりそれぞれの群の間には、2%以下の危険率で有意差を認めた。

これらの結果より考察するかぎり注意力テストの成績のすぐれたもの、必ずしも音楽能力(個人レッスン)においてすぐれているとはいえない。

この理由として考えられることは、音楽能力の判定は、種々の表現技術、美感、先天的感受性、本能的音感覚、律動、敏感な強弱感、活達な迫力感、打鍵の合理性などの複雑なる諸要因

の複合であるに反し、注意力テストは単なる検査作業に於ける能力をあらわすもので、音楽のごとく時間とか練習による努力とかのファクターは含まれていない点である。

この事実はピアノ演奏時における読譜の正確、表現の適・否は単なる注意力の検査にあらわれた結果と一義的な相互関係によって左右さ

れるものでなく、さらに上述の諸因子、就中本人の努力のつみがさねによって態勢がつくりあげられるものと考えられる。

したがって初歩的学習の段階より、指導者は正確なる読譜について、ことのほか厳格な指導を必要とするわけである。

## 結 語

我が国の「邦楽」と云はれる伝統音楽は演奏の技術を伝授するだけで理論を排除する傾向がある。しかし現在では邦楽を組織的に理論的に行なわれる傾向が強化されつつあるが、我が国の長い伝統的な先入感にはピアノ学習者にも潜在しているため、あらかたの学習者が学校教科が優れているにもかかわらず、読譜に対する概念が「芸能」、「おけいこごと」の域を脱せず、浅薄な考えと態度で一不真面目の意ではないが一当るために、先に述べた諸種の誤りを平然と行うような現象が起るものと察するのである。

楽譜の認識と完全なる読譜を学校教科の如く綿密に教授する事が重大であると同時に学習者がピアノ学習を他の教科と同じ態度で当るべきであると確信する。

従来のピアノ学習者は生来の不注意のためにII, IIIの各項に述べた如き状態を生ぜしめるのではなくピアノ学習に対する考え方の疎漏からくるものであり、この隘路を打開せぬかぎり「芸能」や「おけいこごと」より離脱することは不可能であり、ピアノ学習の向上に重大な損失をあたえていることになる。

そもそも日本でピアノの正式な教授が行われたのは明治12年5月(1879年)宮内省雅楽課において翌13年海軍軍楽隊においていずれもドイツ婦人に夫々手ほどきを受け、さらに政府が伊沢修二の提案にもとづいて明治12年10月(1879年)に創設した音楽取調掛に11台のピアノを購入し備えつけたにはじまる。—これが後に東京音楽学校となる—ところが政府の音楽教育の認識はいたってうすく、日清戦争直前の軍事予算のた

め普通予算の縮少の犠牲となり廃止されんとしたが、時の校長伊沢修二の力説と工作により危うく廃止を免れた。

爾来80有余年をへたにもかかわらず未だに「音楽」の認識の度合の薄さが、ピアノ学習にも及び、読譜に対する朦朧とした概念を生みだしているとするれば、これは誠に重大な事である。

ピアノ学習の従来からの認識の惰性から脱皮するためには、先ず楽譜を正しくみること、視るとは眺めることでなく吟味し検査し確認することであり、責任をもって記譜された事柄のすべてを正しく履行することであろう。

このためには学習の初歩の段階において、指導者が学習者に対して正確な読譜をさせるよう、ことのほか厳格にし、適正なる指導を必須とすべきである。正確なる読譜・表現技術の能力などは、一時的な心理検査の結果による注意力の優劣によって決定せられるものでなく、学習者と指導者との一体となった、たゆみなき努力の積みかさねによるものであるといえる。すなわち「確認と実行」を礎とすることにほかならないのである。

本調査研究にあたり、心理関係のテストおよび結果の整理につき多大な配慮を戴いた、島根大学教育学部心理学教室助教授西山啓氏に深く謝意を表するものである。

## 参 考 文 献

- I 有馬俊一、杉中巧、山田浅蔵共著「音楽教育相談室」音楽の友社 昭和39年
- II F. ドリアン; 福田昌作、藤本黎時共著「演奏の歴史」音楽の友社 昭和39年